

## ジャガイモと映画 (20)

### <ジャガイモ袋 (2)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お  
浅間 和夫

#### 72. 『名犬ラッシー』

(原題：LASSIE)

2005年、フランス、イギリス、アメリカ、アイルランド映画、監督：チャールズ・スターリッジ。

イギリスのヨークシャーにおいて、少年ジョー・カラコフ（ジョナサン・メイソン）は、父のサム（ジョン・リンチ）、母のサラ（サマンサ・モートン）と暮らしている。ジョーの親友は美しい毛並のコリー犬のラッシーであり、授業が終わると、学校まで迎えにきてくれるほどの賢い犬である。ある日、その犬を飼うため、ラドリング公爵が孫娘のシーラと共にやってくる。

利口なラッシーは檻<sup>おり</sup>の下<sup>の</sup>の地面に穴を掘って逃げるなど、何度も逃亡を繰り返す。その後遠いスコットランドに連れてゆかれるが、またも脱走する。

ラッシーは廃屋で雨宿りをした後、ヨークシャーを目指して歩き出す。狭い道でトラックに会うが、急ブレーキをかけたため、車は道路に乗り上げてしまう。サイドブレーキをかけずに怒鳴りつけたため、車が動き出し路肩で停まる。そのショックで、荷台に乗せていたジャガイモ袋が崩れ、中身がこぼれ出してしまう（写真1）。

ラッシーはグラスゴーをめざし、160キロの湖を渡る。野犬として捕まり保健所に



写真1 ジャガイモ袋が崩れる

引かれるも逃亡に成功し、なんと裁判中の法廷の証言台に立つ。裁判長は「ついにまともな証人を連れてきたね」と冗談を入れる。ラッシーは隣の建物に飛び移り、トラックの荷台に飛んで逃げ去る。

野原でラッシーに気づいた人形芝居のミジェットから餌をもらい、行動を共にすることとなり、ライオン役で出演したりするが、行く方向が違うため別れる。

冬となり、よたよたとジョーの家に到着するが、ジョーは不在。歌声のする教会へと向かうが力尽きる。幸い近くの子犬が気づいて教会に走り、ジョーのマフラーを引っ張る。ジョーが雪を掻き分けラッシーを確認する。

公爵の知るところとなり、ラッシーの様子を見るや、あの距離を帰ったことに驚き、公爵は自分の犬ではないジョーの犬だと言

いってくれる。ラッシーは元気になり、ジョーたち一家は丘を歩いている。そこへ公爵とシーラが車でやってくる。公爵は、うちの犬の世話をしないかとサムに伝える。シーラは「やっぱり優しいんだ」と公爵に言う。しばらくして、シーラがジョーに貸与されていたコテージに遊びに行ってみると、ラッシーに7匹の子犬ができていた。その後、子犬を連れたラッシー、草原を走るジョーとシーラの姿があった。

### 73. 『風が吹くとき』

(原題：When the Wind Blows)

1986年、イギリス映画。監督：ジミー・テルアキ・ムラカミ。

『スノーマン』などで知られるイギリスの絵本作家、レイモンド・ブリッグズが1982年に発表した漫画をアニメーション映画化したもの。ムラカミ監督(1933-2014)は、カリフォルニア州出身の日系アメリカ人。後半生はアイルランドで暮らし、同国アニメ業界の父とも呼ばれた。日本における本映画の公開は1987年。その日本語版は監修を大島渚、主人公の声を森繁久彌と加藤治子が吹き替えた。音楽をピンク・フロイドのロジャー・ウォーターズ、主題歌をデヴィッド・ボウイが担当した。

主人公は、イギリスの静かな田舎に引っ越し年金生活を送っている老夫婦のジムとヒルダ。しかし世界情勢は日に日に悪化の一途を辿っていた。ある日、戦争が勃発したことを知らされ、政府推奨のパンフレットに従い、保存食を用意をしたり、家のドアを活用して核シェルター作りの準備を始めたりする。そんなとき、ラジオで3分後に敵国のミサイルがイギリスに到達すると

いう放送が流れる。

ジムが役所からもらってきた「防衛パンフレット」に「白いシャツを着たり、紙袋の中に入っていると爆発のとき熱が少しでも避けられる」とあったため、まずビルがジャガイモ袋に入る(写真2)。ヒルダは「バカみたい」と笑うが結局自分も入ることになる。



写真2 戦争に役立ったジャガイモ袋

ジャガイモ袋のお陰で、ふたりは爆発の脅威からは免れるが、放射線の脅威からは逃れられなかった。救援が来ることを信じている二人は、互いを励ましあう。しかし放射線に蝕まれ、しだいに衰弱していく…。核戦争の恐怖を柔らかい雰囲気です描いた反核映画と言えよう。

### 74. 『こうのとりの、たちずさんで』

(英題：The Suspended Step of the Stork)

1991年、ギリシャ映画。監督：テオ・アンゲロプロス。

原題は「こうのとりの宙吊りになった歩み」というような意味らしい。渡り鳥には国境はない。しかし、舞台となったギリシャ北部のフロリナという土地は、アルバニア、

マケドニア、ギリシャの国境地帯であり、いろいろな民族、難民が国境を越えて行き来している。

テレビ・リポーターのアレクサンドロス（グレゴリー・カー）が国境の難民取材に訪れ、ジャガイモ売りの初老の男（マルチェロ・マストロヤンニ）が、かつて失踪した大物政治家と同一人物ではないかと思い、調べ始める。大物政治家の夫人（ジャンヌ・モロー）は、当初取材協力を断るが、後になって、失踪前に留守番電話に残された夫の最後の言葉に何かを感じてテープを持って現れる。

その後、夫人が国境の町までやってきて、そのジャガイモ売りの男と会う（写真3）。しかし、テレビ局クルーによって撮影されたモニターに、「違う。彼じゃないわ」とつぶやき、このジャガイモ売りの男が、失踪した大物政治家だったのか、アルバニアから亡命してきた別の男だったのか、映画でははっきりさせてくれない。

取材し続けるアレクサンドロスは、ある夜、ホテルのバーで身じろぎもせず自分を見つめている少女（ドーラ・クリシクー）に気づき、運命的に愛を交わす。彼は彼女と再びカフェで出会い、後を追って共同住宅の一室に入ると、電線工事の仕事から帰ってきた少女の父が取材中のジャガイモ売り男だったので驚く。

アレクサンドロスが夫人から預かった、テープの声を男に聞かせると、男はテープ



写真3 謎のジャガイモ売りの男

の続きを静かに語り出す。やがて町は集会の前祝いで沸き返る。アルバニアから村の半分の人々が難民として越境して来たために、河を隔てて年に一度お互いの無事を確認め合おうという儀式があるのだ。おまけに今年は結婚式も重なっていた。黒い人影がたくさん無言で現れ、その群れから、一人の花婿が現れる。そして、こちら側には花嫁と村人たち、神父が自転車で現れ、結婚式が無言のうちに終わる。そして、遠くで聞える銃声とともに村人たちは一斉にいなくなる。再び現れる花婿と花嫁…。結局、この娘も何だったのかも明らかにされない。すべてがあいまいに宙づりにされたままで終わる。こうのとりが国境線で足をあげたまま踏み出せないように。

ジャガイモ売りの謎の男は、国境付近で、またしても行方をくらます。彼を最後に見た男の子が言う。「河の上を歩いていったよ」と。男は何者だったのか？ 謎は謎のままで終わる。